

る三波川帯が分布している。三波川帯は四国の山脈部分を形成しており、祖谷渓谷に代表される急峻な地形が連続している。三波川帯の緑色変岩は緑色の縞模様が美しく、庭石として珍重されている。更に、帯状に細く分布している御荷鉾帯、その南側に秩父帯、そして仏像構造線を挟んで南側に堆積岩体である四万十帯が分布している。

四国の尾根部の三波川帯や御荷鉾帯では地すべりが多く発生している。平家の落人部落として有名な祖谷に代表されるように急峻な山脈の所々に平坦地があり、集落として活用されているのを確認できる。この平坦地の殆どが地すべり地といって過言ではない。瀬戸内の花崗岩地帯では、風化したまき土が集中豪雨により崩壊し、時に多くの死傷者を出している。白砂青松に代表される風光明媚な瀬戸内の風景の1要素を構成している地質は、また、雨に極めて弱い危険な性質を併せ持つことを忘れてはならない。

急峻な山間地と狭い沖積地盤、さらには台風の通り道となっている四国では、土石流災害と洪水災害が後を絶たない。河川改修や砂防堰堤の設置などの地道な努力を積み重ねていく以外に災害を避ける方策はない。

豪雨災害だけではなく、四国の瀬戸内側は渇水災害にも悩まされている。讃岐平野に無数に分布するため池は先人達の渇水との戦いの歴史である。その中でも満濃池は弘法大師が作ったと言われる日本最大のため池であり、その自然を生かして四国地方整備局により国営さぬき満濃公園として整備されている。特に、平成6年に瀬戸内一帯は大渇水に悩まされた。その中でも松山市の渇水は厳しいもので、市民の水瓶・石手川ダムの底水(デッドウォーター)まで使用した。

また、台風による風災害も頻発しているが、愛媛県宇摩地方の「やまじ風」は珍しい局地風であり、日本の3大局地風に数えられている。これは日本海の低気圧に向かって四国山脈を越えた南風が局地的に30mを越える強風をもたらしているものである。

四国の自然災害の中でもっとも甚大な被害をもたらすのは巨大地震である。巨大地震の発生源は2つある。一つは四国を東西に横切る中央構造線系の活断層による直下型地震であり、もう一つは南海トラフで発生するM8を越えるプレート境界型地震である。南海地震が発生すれば、未曾有の大規模津波や家屋倒壊、さらには斜面崩壊などで死者は1万人近くに達すると予想されている。

自然災害は、陸地部だけでなく、海でも発生している。瀬戸内海は世界でも最も豊かな内海であるが、河川からの汚濁物質の流入により赤潮が毎年のように発生している。この赤潮は養殖漁業を直撃している。また、真珠母貝の大量斃死は宇和海での真珠養殖に致命的なダメージを与えている。

以上、四国の自然災害を概観した。四国は造山帯に位置しており、太平洋と瀬戸内海という豊かな海に囲まれている関係で、地形は起伏に富み、地質が複雑で、また、四万十川に代表される清流に恵まれており、山から海に至る極めて豊かな生態系が育まれている。その反面、自然災害には本当に悩まされている。

## 2. 四国の最近の自然災害

最近の四国の主な自然災害を記しておく。渇水災害、梅雨前線・秋雨前線・台風による豪雨災害(洪水、土砂災害)、地震災害と各種の災害が発生している。図-2に今夏の台風災害も含めて自然災害発生地点を示しておく。

平成6年 北四国渇水災害

松山市では7月26日から時間給水開始、8月22日から5時間給水(16~21時)し、2ヶ月間継続した。晩秋まで時間給水が継続した。

平成7年7月 大洲洪水災害(梅雨前線)

床上・床下浸水 1195戸

平成10年9月 高知水害(秋雨前線)

高知市が水没、死者・行方不明者8名、浸水2万4千戸、日雨量524.5mm、排水ポンプが間に合わず高知市のゼロメートル地帯が水没した。水圧で蓋が飛んだマンホールに落ちて数人が死亡し、マンホールの蓋の構造を見直すきっかけとなった。

平成10年10月 三崎町土石流災害(台風10号)

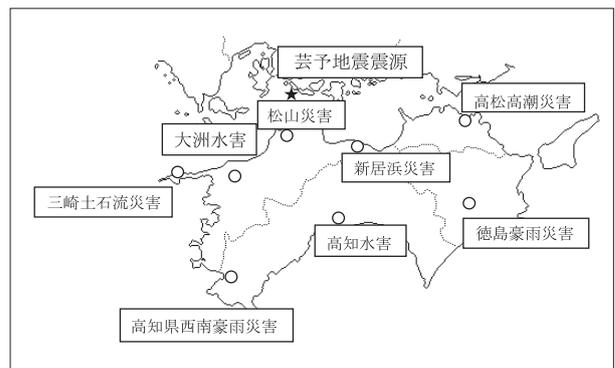


図-2 最近の四国の自然災害発生地点